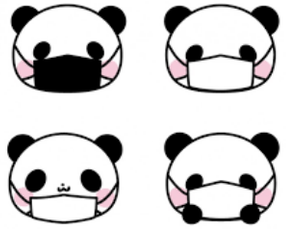
ドキドキ IZUCHU図書館 わくわく



和泉中学校図書館　第７７号　２０２１年３月発行

●あたらしい本の中から

◆『棚からつぶ貝』◆　イモトアヤコ・著

「世界の果てまでイッテＱ」で世界を飛び回っているイモトさんのエッセイ集

世界で出会った人々、芸能人の友だち、大好きな家族、結婚の話など、ほのぼのしたり、クスッと笑える話がいっぱい。

自分の人生を「棚からぼたもち」にたとえているイモトさん。苦労せずに幸運が舞い込むという意味ですが、イモトさんは「棚の下に行かなければぼたもちは落ちてこない」と書いています。行動したから今のイモトさんがあるんですね。

◆『夜カフェ』◆　倉橋燿子・著

きっとあなたも夜カフェに行きたくなるはず

いじめっ子のリーダー格と離れるために、私立中学を受験したが不合格。結局、また彼女と同じクラスになってしまい絶望していたハナビ。しかも家では両親のケンカが絶えず、とうとうハナビはカフェを営むおばさんの家に住むことになります・・・。

これは学校にも家にも自分の居場所を見つけられず苦しんむ子たちが、寄り添いあっておいしいご飯を食べながら心にうるおいを取り戻していく物語です。

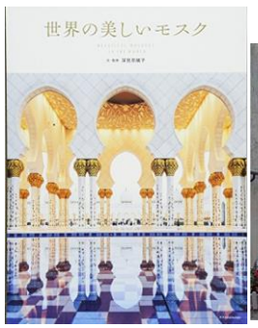
◆写真集「ヨーロッパの街角」・「ヨーロッパの路地・散歩道」◆

石畳の街並みに人々の日常がしっくりとなじんでいる風景。いつか行ってみたいと心ひかれます。写真集は絵を描くときなどによく利用されています。

◆「世界の美しいモスク」◆

モスクとはイスラム教の礼拝堂のこと。見事なモザイクタイルや、目にまぶしいほどの白亜のモスクなど、美しい建築物が50紹介されていてうっとり。

イスラム教徒で埋め尽くされたメッカの写真は圧巻！



春休みは家でたくさん本を読もう

◆『ようこそ、難民！』◆　今西みね子・著

１００万人の難民がやってきたドイツで起こったこと

中東からドイツに100万人の難民が押し寄せました。最初は歓迎ムードだったのに、人々は次第に難民に対して批判的になっていきます。想像してみて。ご近所の堺市の人口が84万人。100万人って相当な数ですよね。

では、なぜドイツはそんなにもたくさんの難民を受け入れるのでしょう？この本は少年マックスを主人公にした物語になっています。考え方のちがう人々が言い争う中で偏見を持たずきっぱりとした行動がとれる友人の姿に何かを学ぶマックスを描いています。

◆なぜ、めい王星は惑星じゃないの？　布施哲治・著

「すい・きん・ち・か・もく・どっ・てん・かい・めい」から「めい」がなくなった理由

かつては、太陽系の惑星の順番を上記のように覚えていましたが、2006年に冥王星は惑星ではなくなりました。太陽系って何？どこからが宇宙なの？など、宇宙の始まりから惑星の発見まで、歴史を追いながらわかりやすく説明されています。中でも、惑星を山手線にたとえて説明しているところはとてもわかりやすい。

それにしても、2006年まで「惑星」の定義がなかったということも驚きです。「今まで事実と思っていたことも変わっていく。」それが科学の進歩というものだと著者は述べています。

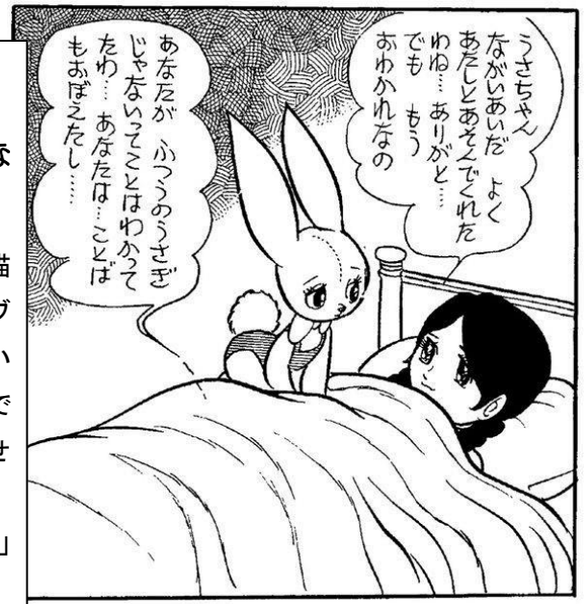
短編まんがシリーズ

◆手塚治虫からの伝言　全１０冊

おもしろくて、悲しくて、心にのこる…そんな手塚マンガの沼にはまってみてください

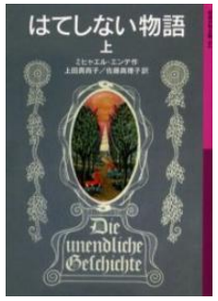
「まんがの神様」と呼ばれる手塚治虫が生涯に描いたマンガ原稿の枚数は15万枚にのぼります。「ブラックジャック」「鉄腕アトム」など、その題名は聞いたことがあることでしょう。手塚氏没後30年。それでも変わらずに読まれている作家はめったにいません。

このシリーズは、「友情」「命」「人間というもの」「ホラー」などのテーマごとに編集されています。



有名すぎて逆にいままで紹介していなかった本　3冊

① ◆『はてしない物語』上・下◆　　ミヒャエル・エンデ著



現実世界と本の世界が交互にあらわれる不思議な物語。
本の世界に入っていったバスチアンはファンタージェンを救えるのか？

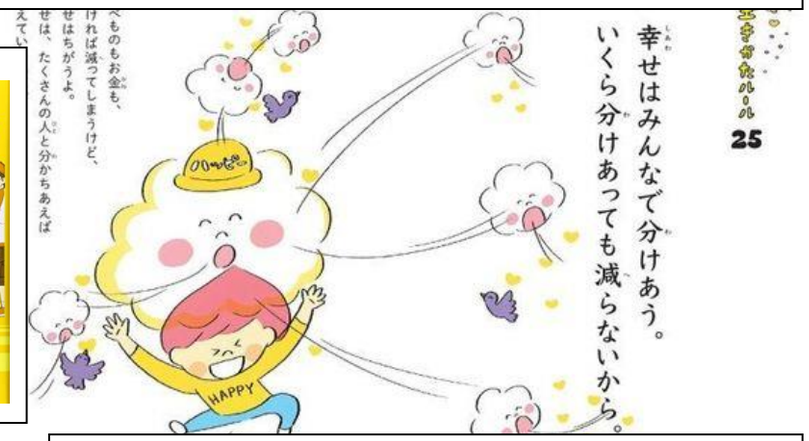
少年バスチアンは、いじめっ子に追い回され古本屋に逃げ込み、そこで目にした「はてしない物語」という風変わりな本に興味を抱きます。お金を持っていなかったバスチアンは店から本を盗み、学校の物置で読み始めます。本の世界ではファンタージェンという国が、正体不明の〈虚無〉におかされ、滅亡寸前に。ファンタージェンを救うことが出来るのはなんと物語を読んでいる人間バスチアンでした。物語の呼びかけにこたえて本の世界に入りこんだバスチアンと、そこで出会ったアトレーユ。二人の少年がまきこまれてゆく不思議な冒険物語です。映画「ネバーエンディングストーリー」の原作です。

◆生きかたルールブック◆　　齋藤孝・監修

５０個の生きかたのルールが書いてある。イラストがほっこり

・ちっぽけなみえをはならい人になる
・満足する心を育てる
・迷いや不安があっても自分で決める・・・など、
「ちょっとしたこと」を教えてくれる本。しかし、人生はこの「ちょっとしたこと」で出来ているのだ。
私（司書）は最後の言葉が一番好きやなぁ。

→未来の自分は幸せになると信じる



②◆『ぼくらの七日間戦争』　　宗田理・著

大人への宣戦布告。自分たちの力で大人にいどんでゆく彼らの姿がとても痛快！

夏休みを前にした1学期の終業式の日、東京下町にある中学校の、1年2組の男子全員が姿を消した！
いったいどこへ・・・？FM ラジオから聞こえてきたのは、消えた生徒たちが流す「解放区放送」。彼らは廃工場にたてこもり、ここを解放区として大人たちへの叛乱（はんらん）を起こしたのでした。教師、親、テレビ、警察、市長選挙汚職事件までも巻き込んだ、7日間におよぶおとなたちとの戦争。
ぼくらシリーズとして続編がたくさん出版されています。

③◆『あしながおじさん』　　ジーン・ウェブスター・著

生きることの喜びにあふれ、話したいことが次々にわいてくる手紙の数々。まさに名作です。

ある日、孤児院育ちのジュディに幸運が舞い込みます。彼女の作文の才能をみこんだある人物が、彼女に大学進学のための資金援助をしてくれることになったからです。そのかわり、条件がひとつ。それは学業の様子を毎月一回、必ず手紙で報告をすることでした。

初めて孤児院を出て外の世界で生活することになったジュディ。彼女にとっては見るもの聞くものすべてが新鮮です。初めて自分でお金を出して買い物をした時のこと、友達のこと、パーティのこと、長期休暇の農園滞在のこと、それらを心おどるような文体で手紙に書き記します。その手紙がそのまま物語になっています。

◆写真絵本『琉球という国があった』◆

今から１４０年前まで沖縄には王様がいた。

私たちは琉球のことは授業でもほとんど習いませんが、この本は、豊かににぎわっていた琉球王国の暮らしぶりを写真やイラストでわかりやすく伝えています。そんな琉球に試練の時代が訪れます…。
ページを開けると、青空をバックにした美しい首里城の写真が登場します。戦争で焼け落ちた首里城は1992年に復元されましたが、2019年にふたたび火災で焼けてしまいました。

この本は首里城再建を目指して、新たに復刊されたものです。

◆『ビジュアル図鑑　スーパークールテック』◆

本の見た目からしてスーパークール！
おしゃれなノートパソコンかと思ったら、本なんです。

もうびっくりな本です。1ページごとに、超ハイテクなすごい技術が紹介されています。へ～いま、こんな技術や商品が開発されているのか？！と見ているだけでワクワクします。
例えば、空気中の水蒸気を集めて液体にし、ペットボトルにためて持ち運べるフォンタスという商品。自転車をこいでいる間に水がためられるタイプもあります。そのような身近なものから、建築技術や海に捨てられたプラスチックゴミを集めて除去する大きな発明ものまで最新の情報が満載！